

第45回東京女子医科大学・神経懇話会

日 時：2015年1月27日（火）18:00~20:00

場 所：東京女子医科大学 臨床講堂第2

一般演題 18:15~19:00

座長（病理学（第一））澤田達男

1. 脳梗塞ペナンブラにおけるリゾホスファチジルコリンの関与

(東京女子医科大学¹ 医学部病理学（第一）教室,² 神経内科) 猪瀬悠理¹, 北川一夫², 柴田亮行¹

2. 左下肢不随意運動にて大脳皮質基底核症候群 (corticobasal syndrome) が考慮された1例

(東京女子医科大学神経内科) 久保田愛, 樋口瑛子, 喜古英一, 飯嶋 睦, 北川一夫

3. Time-SLIP法を用いた体位による脳脊髄液動態解析

(東京女子医科大学¹ 医学部3年,² 画像診断・核医学科) 新井桃子¹, 阿部香代子², 坂井修二²

4. Angelman症候群に類似した表現型が, X染色体上のSLC9A6遺伝子変異に起因することが判明した17歳男子の1例

(東京女子医科大学小児科) 七字美延, 舟塚 真, 小國弘量, 大澤真木子, 永田 智

特別講演 19:00~20:00

座長（病理学（第一））柴田亮行

組換えウイルスを用いたALS病変モデルの樹立と解析

((公財) 東京都医学総合研究所神経変性病理・プロジェクトリーダー) 渡部和彦

当番世話人:(東京女子医科大学医学部病理学（第一）) 柴田亮行

共 催:東京女子医科大学・エーザイ(株)

1. 脳梗塞ペナンブラにおけるリゾホスファチジルコリンの関与

(東京女子医科大学¹ 医学部病理学（第一）教室,² 神経内科)猪瀬悠理¹・北川一夫²・柴田亮行¹

急性期脳梗塞ペナンブラでは炎症が起こっており, 状況が改善されないと中心部壊死巣に巻き込まれる。したがって, ペナンブラの炎症反応制御は残存細胞を保護することで患者の予後改善に貢献すると期待される。我々は最近, ペナンブラにおいて, 脂質由来炎症性メディエーターの一種リゾホスファチジルコリン (LPC) を産生放出する分泌型ホスホリパーゼ A₂ (sPLA₂) がニューロンとアストロサイトで, LPC受容体である G2A と P2X7R がミクログリアでそれぞれ強発現していることを報告した。本研究では, 剖検脳を用いた炎症促進性遺伝子産物の免疫組織化学およびマウス由来ミクログリア培養細胞株 BV-2 を用いた免疫細胞化学と RT-qPCR 解析を行った。解析物質である monocyte attractant protein-1 (MCP-1) とそのレセプター CCR2, interleukin-1β (IL-1β) および inducible NO synthase (iNOS) の免疫活性は, ペナンブラのミクログリアで増強していた。BV-2細胞も G2A, P2X7R, MCP-1, CCR2, IL-1β および iNOS の免疫活性を呈した。BV-2細胞における MCP-1, CCR2, IL-1β および iNOS の転写レベルは LPC 刺激で有意に上

昇し, これらは抗 G2A 中和抗体や P2X7R アンタゴニストの前処理で有意に抑制された。以上から, ペナンブラでは LPC がミクログリアにおける MCP-1, CCR2, IL-1β および iNOS の発現を増強することが判明した。

2. 左下肢不随意運動にて大脳皮質基底核症候群 (Corticobasal syndrome) が考慮された1例

(東京女子医科大学神経内科) 久保田愛・

樋口瑛子・喜古英一・飯嶋 睦・北川一夫

症例は74歳の女性である。72歳時に左下肢の不随意運動で発症した。入院時, 神経学的所見として左上肢の協調運動障害, 左下肢の筋強剛と痙縮, 左下腿のジストニー様不随意運動, 左足関節以下の背屈外反-底屈内反する振戦様不随意運動, 左足皮質性感覚障害, 歩行障害を認めた。脳血流 SPECT では右優位に中心領域上部-両側頭頂葉上部に血流低下を認めた。また, DaT-SPECT では右優位に線条体へのドパミントランスポーター結合能の低下がみられた。左脛骨神経の体性感覚誘発電位では long-loop response が出現し, 左下肢の不随意運動は大脳皮質感覚運動野が起源と推察された。以上の所見より, 大脳皮質基底核症候群 (Corticobasal syndrome) と診断した。神経症候は“alien limb phenomenon”と解釈されたが, その下肢症候としての振戦および大脳皮質の関与は我々の報告以外では検索し得ず, 新たな知見と思われた。